

『遠野物語』の文献学的研究

石井正己

一、文献学的研究の重要性

柳田国男の『遠野物語』は日本民俗学の記念碑として尊重されてきたが、それが災いしてか、基礎的な研究は意外に遅れている。そのひとつに文献学的研究がある。初版に先立つ初稿本三部作が重要であることは言うまでもないが、むしろ、ここでは、戦前の初版と増補版、戦後の選書や文庫、定本、全集などが形態を変えて出されたことに注目したい。

特に、一九一〇年の初版から三五年の増補版には大きな変更がある。増補版は文字どおり、「旧版序」「遠野物語」（以下「物語」と略述。頭注がある）を前後から挟むように、「再版覚書」「題目二項」と「遠野物語拾遺」（以下「拾遺」と略述。頭見出しがある）「後記（折口信夫）」「索引」などを付け加えている。この増補版は、柳田の満六〇歳の誕生日に刊行されているので、還暦を迎えた柳田を祝福する本であった。それと同時に、この年は語り手であり書き手であった佐々木喜善の三周忌に当たるので、思い半ばにして死去

した喜善を鎮魂する本だったとも思われる。^{（注1）}この前後は、日本民俗学が組織的にも理論的にも確立されてくる時期であり、この増補版もそれを押し進める本の一冊であったことは間違いない。

ところが、戦後の選書や文庫の中には、増補版の構成が崩されたものが出された。おそらく出版の事情の悪化もあるのだろうが、柳田の生前のことであるから、むしろ積極的に崩されたと考えるべきなのだろう。こうした戦後の選書や文庫は、手軽で読みやすい形態であり、日本民俗学の大衆化を進める役割を担っていたと思われる。例えば、角川文庫は、一九五五年から十三年間に一〇刷を出した初版と、六九年ごろから九二年までの二十三年間に四〇刷を出している改版とがある。だが、よく見ると、初版から改版にかけて、「解説」「年譜」が入れられただけでなく、仮名遣い・漢字の字体・振り仮名の量などが大幅に変えられている。そうした手当てをしたので、この改版は今日、流布本とも言えるほどよく読まれるようになったにちがいない。しかし、この角川文庫は、先の三五年の増補版と比べると、「物語」の頭注が大幅に削られ、「拾遺」の頭見出しがすべて削除されるなどして、そのままではない。活字や印刷

というメディアの中でも、やはり文献学的研究を経たうえで諸本を使用しないと危険であることがわかる。本というと、活字や印刷によって固定化されているという先入観をもってしまいが、決してそんなことはない。本が時代を超えて生きのびてゆくためには、次々と作り直されることのほうがむしろ自然だからだ。

特に、『遠野物語』の場合、柳田の死後も、我々の抱くストーリーを担って本が作られ続けた経緯がある。その場合、初版を底本とする場合が多い。その原因は、増補された「拾遺」が喜善の著述とも柳田の著述とも言えないことにある。そうした考え方の根底には、喜善や柳田という特権化された個人を対象とする研究から抜け出せないでいる現状がある。また、最近、地元の遠野では別な動きが始まった。遠野市立上郷中学校『中学生による口語訳遠野物語』（同校、一九九二年）、後藤総一郎監修・佐藤誠輔訳『（口語訳）遠野物語』（河出書房新社、一九九二年）が相次いで刊行されたことである。前者は「物語」「拾遺」の口語訳、後者は「物語」の口語訳であり、どちらも子供向けに書かれたものである。口語訳は、『遠野物語』を次の世代に向けて再生させることを目指した重要な切実な試みであった。

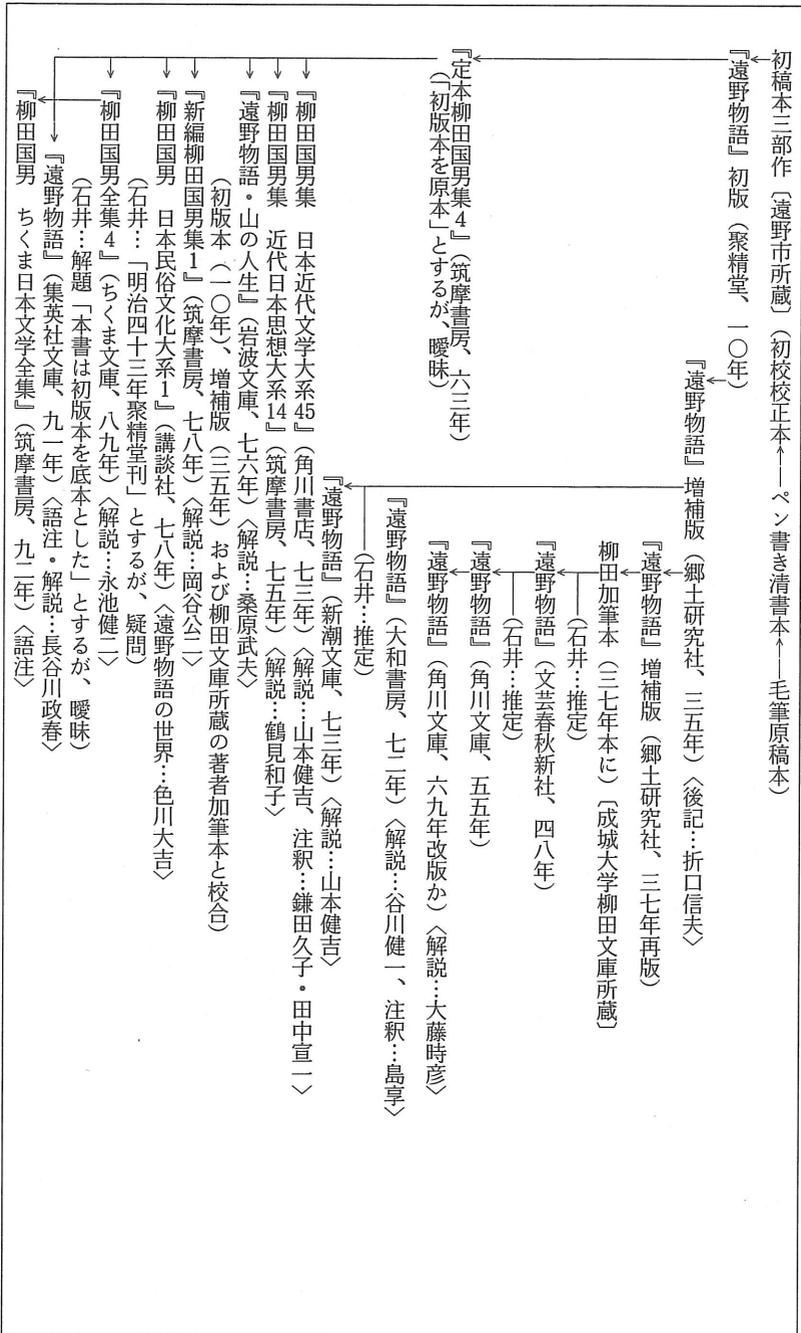
こうして見てくると、一口に『遠野物語』と呼ぶそれが厳密には複数存在し、それらには、柳田や彼を受け継いだ我々のストーリーが込められていることになる。今、我々は、『遠野物語』の諸本がなぜ作られたのか、また、なぜ作られ続けているのかを考えなければならぬ時期に来ている。そうした問いに対して、文献学的研究

をとおして少しでも答えを出してみたいと思う。

二、『遠野物語』諸本の系列化

『遠野物語』の諸本の関係を示したのが【表1】である。この中に、三五年の柳田の還暦、四五年の戦争の終結、六二年の柳田の死去という三点を加えてみると、いくつかがわかってくる。柳田の還暦以後に増補版が刊行され、戦後になると本の小型化が進み、柳田の死去後は「解説」が付き、七〇年代がブームになっていることなどである。さらに重要なのは、これらの『遠野物語』が大きく初版系と増補版系とに分けられることである。^{〔注2〕}

まず初版系は、七〇年代の日本近代文学大系本以下すべてが、六三年の定本柳田国男集本を底本にしていて、一〇年の聚精堂本を底本としていないことに注意しなければならない。この定本柳田国男集本は聚精堂本を底本としているが、細部についてはそのままではないので、七〇年代以降の初版系諸本はすべて原形に遡ることができない。この定本柳田国男集本は晩年の柳田が承認したテキストとして権威を持ち、それ以降まさに「定本」として機能しつづけてきたのである。しかも、定本柳田国男集本以降の初版系諸本はすべて柳田という文脈の中で、『山の人生』（一九二六年）をはじめとする他の著述と組み合わせられて編集されている。その結果、『山の人生』の中で後に整えられた山人観と連関させて『遠野物語』を読むことが習慣になってしまった。こうした初版系の本作りは柳田学の理解



のために重要な役割を果たしてきたが、今と比べてみると、個々の本の性格を見失わせ、読みを規制してきたことも、あながち否定することができない。

一方、増補版系は思いの外複雑なテキスト生成を繰り返していることがわかってきた。三五年の郷土研究社本では、「拾遺」をはじめとするいくつかの内容が増補された。特に、初版系と増補版系とを分ける大きな差異は、この「拾遺」を含むかどうかにある。この「拾遺」は、増補版の「再版覚書」や折口信夫の寄せた「後記」にあるように、佐々木喜善の原稿を柳田と鈴木脩一(棠三)とが半分ずつ書き改め、書き直したものである。そのため、定本柳田国男集本の「あとがき」に「遠野物語拾遺」は先生の執筆されたものではないので省いた」とあり、ちくま文庫本の「解題」に「遠野物語拾遺」は鈴木脩一(棠三)が刪定整理したものである」とあるようにして、「拾遺」は柳田の著述から排除されることになった。こうして、「拾遺」を排除する考えによって作られたのが、結果として、前述した定本柳田国男集本以降の初版系諸本だったのである。また、一方、この「拾遺」は、現在刊行中の『佐々木喜善全集』(遠野市立博物館、一九八六)からも排除され、今後、鈴木脩一(棠三)の著述として出版されることもおそらくないだろうと思われる。こうして甬つりで、継子扱にされている「拾遺」を、民俗学者や口承文学研究者が読みの対象にし得るかということが、今後の大きな課題として残されている。

こうしてみてみると、今日、我々は一口に『遠野物語』と言って

しまいが、それが初版系と増補版系のどちらで、どのような性格をもつ本なのかということ、十分認識せずには使用できないことがわかる。しかし、誤解をしないでほしいのは、決して初版系最初の聚精堂本や増補版系最初の三五年の郷土研究社本だけを原典として重要視しようというのではない。大切なのは、岩波文庫本でも角川文庫本でも、それらの本がどのような経緯と方法で作られたかということを知ったうえで使用することだ。これは、ある意味では改めて述べるまでもない文献学の初歩だといってもよい。しかし、そのことは、活字や印刷という文化にすっかり犯された現代において、間違いなく盲点になっている。都合のいい物語だけを論じるのではなく、『遠野物語』とは何か、という本質的な問いに答えようとするとき、この文献学的な問題を軽視することはおそらくできない。

三、初版系諸本の構成

まず初版系の諸本の構成を見てみよう。最初の『遠野物語』(聚精堂、一九一〇年。日本近代文学館、一九六八年刊行の複製に拠る)の構成は、次の①～⑦の順となる。

- ① 表紙「遠野物語」
- ② 内題「遠野物語」(三百五十部ノ内第 号)
- ③ 「此書を外国に在る人々に呈す」
- ④ 序文(初版序文)

を削除した本もあるが、^(注3)聚精堂本の①～⑦を基本的には受け継いでいる。その際、本によって、⑧～⑩の要素をそれぞれ増補していることになる。なかでも、⑨「遠野郷本書関係略図」は、後述するような増補版系諸本から逆に入り込んできた要素であると考えられる。すでに述べたように、定本柳田国男集本以降の初版系諸本は、すべて柳田の他の著述、特に『山の人生』(一九二六年)との組み合わせで構成されているところに特色がある。例えば、『後狩詞記』(一九〇九年)と組み合わせるのは、新編柳田国男集本だけである。もしこうした組み合わせが広く行われていたら、『後狩詞記』と『遠野物語』の序文相互の関わりなどはもっと早く発見されたにちがいない。組み合わせということを考えるなら、例えば、『石神問答』(一九一〇年)、『時代ト農政』(一九一〇年)、『山島民譚集』(一九一四年)など『遠野物語』刊行前後の著述も考えられる。おそらく、そうした試みがなされれば、また新たな読みの空間を切り開くことが可能になるだろう。何れともあれ、我々の読みの空間がテキスト相互の規制力に影響されてきたことについて、繰り返し注意を払っておく必要がある。

四、増補版系諸本の構成

次に増補版系諸本を見てみよう。最初の『遠野物語 増補版』(郷土研究社、一九三五年)の構成は、次のようになる。なお、⑩は初版系のそれを受け継ぎ、新たな要素についてはⅠ～Ⅶで示

した。

- ① 表紙「遠野物語 増補版 柳田国男」
- ② 内題「遠野物語 増補版 柳田国男」
- I 初版本・ペン書き清書本・毛筆原稿本、佐々木喜善「遠野郷略図」の写真
- ③ 「此書を外国に在る人々に呈す」
- II 目次
- III 「再版覚書」
- ⑤ 「題目」(遠野物語題目)
- IV 「題目」(遠野物語拾遺題目)
- ④ 序文(旧版序、初版序文)
- ⑥ 「遠野物語」本文(文語体、頭注六六箇所)
- V 「遠野物語拾遺」本文(口語体、頭見出し三五四箇所)
- VI 「後記」(折口信夫)
- VII 「索引」
- ⑨ 「遠野郷本書関係略図」
- ⑦ 奥付

大きな動きはV「拾遺」本文であるが、その他、Iの写真で初版刊行までの成立過程を垣間見せたり、III「再版覚書」に全体の序文の機能を持たせ、それに対応するVI「後記」(折口信夫)を入れたり、⑨「遠野郷本書関係略図」で物語の地名を地図の中に固定化したりなどという特色が見られる。この構成には、二五年前の初版を

【表3】

郷土研究社本初版	(三五年)	郷土研究社本再版	(三七年)
	①② I	①② I	①② I
	③ II	③ II	③ II
	④ III	④ III	④ III
	⑤ IV	⑤ IV	⑤ IV
	⑥ V	⑥ V	⑥ V
	⑦ VI	⑦ VI	⑦ VI
	⑧ VII	⑧ VII	⑧ VII
	⑨ VIII	⑨ VIII	⑨ VIII
	⑩ IX	⑩ IX	⑩ IX
	⑪ X	⑪ X	⑪ X
	⑫ XI	⑫ XI	⑫ XI
	⑬ XII	⑬ XII	⑬ XII
	⑭ XIII	⑭ XIII	⑭ XIII
	⑮ XIV	⑮ XIV	⑮ XIV
	⑯ XV	⑯ XV	⑯ XV
	⑰ XVI	⑰ XVI	⑰ XVI
	⑱ XVII	⑱ XVII	⑱ XVII
	⑲ XVIII	⑲ XVIII	⑲ XVIII
	⑳ XIX	⑳ XIX	⑳ XIX
	㉑ XX	㉑ XX	㉑ XX
	㉒ XXI	㉒ XXI	㉒ XXI
	㉓ XXII	㉓ XXII	㉓ XXII
	㉔ XXIII	㉔ XXIII	㉔ XXIII
	㉕ XXIV	㉕ XXIV	㉕ XXIV
	㉖ XXV	㉖ XXV	㉖ XXV
	㉗ XXVI	㉗ XXVI	㉗ XXVI
	㉘ XXVII	㉘ XXVII	㉘ XXVII
	㉙ XXVIII	㉙ XXVIII	㉙ XXVIII
	㉚ XXIX	㉚ XXIX	㉚ XXIX
	㉛ XXX	㉛ XXX	㉛ XXX
	㉜ XXXI	㉜ XXXI	㉜ XXXI
	㉝ XXXII	㉝ XXXII	㉝ XXXII
	㉞ XXXIII	㉞ XXXIII	㉞ XXXIII
	㉟ XXXIV	㉟ XXXIV	㉟ XXXIV
	㊱ XXXV	㊱ XXXV	㊱ XXXV
	㊲ XXXVI	㊲ XXXVI	㊲ XXXVI
	㊳ XXXVII	㊳ XXXVII	㊳ XXXVII
	㊴ XXXVIII	㊴ XXXVIII	㊴ XXXVIII
	㊵ XXXIX	㊵ XXXIX	㊵ XXXIX
	㊶ XXXX	㊶ XXXX	㊶ XXXX
	㊷ XXXXI	㊷ XXXXI	㊷ XXXXI
	㊸ XXXXII	㊸ XXXXII	㊸ XXXXII
	㊹ XXXXIII	㊹ XXXXIII	㊹ XXXXIII
	㊺ XXXXIV	㊺ XXXXIV	㊺ XXXXIV
	㊻ XXXXV	㊻ XXXXV	㊻ XXXXV
	㊼ XXXXVI	㊼ XXXXVI	㊼ XXXXVI
	㊽ XXXXVII	㊽ XXXXVII	㊽ XXXXVII
	㊾ XXXXVIII	㊾ XXXXVIII	㊾ XXXXVIII
	㊿ XXXXIX	㊿ XXXXIX	㊿ XXXXIX

(1) 使用した本がその初版でない場合、「六八年」のように線を付けた。
 (2) 角川文庫本初版は「後記」を「解説」とし、改版は「初版解説」とする。

組み込みながら、新しい増補版をどのように作るかということを考えた苦労がしのばれる。それは単なる増補ではなく、文学性の強い初版を新しい学問である民俗学の対象に組み変えてゆこうとするものだった。

しかし、以後、初版の内容をどのように組み込むかという点で、この増補版系諸本は複雑な動きを見せることになる。その違いをわかりやすくするために、それぞれの要素を整理したのが【表3】である。以下、諸本の特色をまとめてみよう。

三十七年の郷土研究社本は、③「此書を外国に在る人々に呈す」が④⑤⑥の前に来て、③④⑤⑥という初版の時の構成に戻されている。これは、③④⑤⑥の「物語」とIVVの「拾遺」とがはっきり分断されたことを示している。

柳田文庫の朱書加筆本は、この三十七年の郷土研究社本への書き入れであり、表紙には「改版用(柳田)」と書かれている。後の文芸春秋新社本の刊行から見ても、三十七年から四八年までに加筆されたと推定される。朱書の内容は大きく三点ある。第一は、「再版覚書」のところに、「コレダケ/一二四ノ次へ入へし」とあって、「再版覚書」を「拾遺」本文の前に移すことを指示している。こうなったとき、「再版覚書」は、折口信夫執筆の「後記」と対応する枠組みとしての機能を失い、単なる「拾遺」の序文になってゆく。第二は、「物語」の頭注六六箇所のうち四五箇所を削除していることが挙げられる。その際、物語二に「此項ノコスノ註ニシテ小サク入レン」、物語六三に「イキ」とあって、後注にすることを指示したり、物語四二・物語四六・物語五一のように、それまでの頭注を本文に

() 付きで入れることにしたりするかたちを取って復活させてもいる。第三は、若干の本文の書き換えと「物語」の振り仮名の大幅な削除である。この削除は、繁雑さを避けるためとも考えられるがむしろ「拾遺」の振り仮名の付け方に合わせたのではないかと考えられる。

文芸春秋新社本は、若干の違いはあるが、おそらく柳田文庫の朱書加筆本を底本として作られたものである。これは文芸春秋選書の一冊であり、小型化・簡素化してゆく本作りの先駆けになった。しかも、郷土研究社本が良質な紙を使っているのに対して、戦後間もなくの出版なので、実に悪質な紙を使っている。内容的には、Iの写真や③「此書を外国に在る人々に呈す」を削除しているほか、「物語」の頭注三八箇所を削除して、後注にしたり、本文に() 付きで入れたり、また、「拾遺」の頭見出しをすべて削除したりしている。こうした削除や変更が行われたのは、おそらくこの時期に確立され、後にまとめられる『口承文芸史考』(一九四七年)や『日本昔話名彙』(一九四八年)、『日本伝説名彙』(一九五〇年)などの理論と抵触すると考えたのではないかと思われる。

角川文庫本初版は、おそらく文芸春秋新社本を底本として作られたものである。ただし、④「初版序文」とⅢ「再版覚書」がその順序で前に並んでいる。また、Ⅵ「後記」(折口信夫)が「解説」と呼び変えられている。こうした組み替えによって、④Ⅲの二つに全体の序文として機能をもたせ、Ⅵと合わせて成立の経緯を明らかにするが、三五年の郷土研究社本にあったⅢとⅥの対応はすっかり希

薄になってしまっている。そして、柳田の死後に出された改版では、文字どおりの「解説」と「年譜」とが付けられている。

大和書房本は、三五年の郷土研究社本を底本としている。しかし、構成や表記は大幅に変えられている。特に、⑩の遠野郷の写真が四八ページ入れられているのは注目に値する。これは、三五年本にあったIの写真を削除し、それを補完するために付け加えられたものである。この遠野郷の写真は、その後次々と出版される『遠野物語』関係の写真集の先駆けをなすものである。また、この本は、本文に「頭注」「補注」という注釈を施した点でも最も早い。つまり、この大和書房本は、『遠野物語』のコンテキスト(民俗)やテキスト(表現・表記)が理解しにくくなってきたので、それを解説するという点で、一貫した姿勢をとっているのである。

新潮文庫本は、おそらく三五年の郷土研究社本を底本としているが、角川文庫本改版の構成や初版系の定本柳田国男集本の本文を取り入れていると思われるところもあり、その成立は単純ではなさそうである。この本の特徴は、⑧「遠野郷本書関係略図」を①の表紙の次に入れた点にある。それによって、読者は遠野郷を俯瞰するイメージから物語に入ってゆくことになる。

五、本文の書き換え―物語五五の場合―

本文の書き換えを具体的に考察するために、ここでは、二代まで河童の子を孕んだ家の伝承を記した物語五五を取り上げてみよう。

現在残る本文として最も古いのは、池上隆祐旧蔵で、遠野市に寄贈された初稿本三部作のうちの毛筆原稿本である。やや長くなるが、その全文を掲げてみよう。

五十五、川には河童多く住む猿ヶ石川殊に多し松崎村の川端の家に二代迄つゞけて河童の子を孕みたる者あり生れし子は斬り刻みて一升樽に入れ土中に埋めたり形極めて恠しきものなりき女の躰の里は新張村の某此も川端の家なり其主人人に其始末に語り彼の家一同或日畠に行きて夕方帰らんとするに女川の汀に踞りてにこゝと笑へり次の日の昼休にも同じことなりかくすること日を重ねしに其頃其女の許に村の某といふ者通ふといふ噂たてり始は躰が濱へ駄賃附に行きたる留守を窺ひしか後には躰とねたる夜さへ来るなり河童なるべしといふ評高くなりたれば一族集りて之を守れとも何の甲斐も無く躰の母も行きて娘の側に宿りしに深夜其女の笑ふ声を聞きさては来てありと知りながら身動きもかなはず人々如何ともすべきやうなかりき其産は極めて難産なりしに或者の曰く馬槽に水をたゝへ其中にて産まば安からんとのこと之を試みれば果して然りき其子は手に水搔あり此女の母も亦曾て河童の子をうめりと云ふ二代や三代の因縁にては無しといふ者もあり此家も如法の豪家にて白岩市兵衛といふ士族なり村會議員をしたることもあり

「すべきやうなし」の「し」を消して「かりき」に改め、「産めば」の「め」を消して「ま」に改めている。ここでは、改めた本文

を示しておいた。前者は、「宿りしに」「難産なりしに」という過去時制に合わせたものであり、後者は、文語文法で仮定条件を表すために未然形に直したものである。どちらも要領を得た推敲であると云つていい。

しかし、我々が刊本として目にするところの『遠野物語』（聚精堂、一九一〇年）は、本文そのものに大幅な手を加え、片仮名の振り仮名が丁寧につけられている。個々の表現の小さな差異がどのような効果を生みだしたかについては、今後さらに検討されなければならぬが、最も大きな差異は、これまでも注目されてきたように、末尾の「白岩市兵衛」という実名を「○○○○○」と伏せ字にした点にある。河童の子を孕む―これは間男の子であること、を隠蔽する物語としても読める―という家の伝承なので、それを忌まわしいものと考えて実名を伏せるといふのは、一つの見識であろう。しかし、「○○○○○」という表記は意識的にその名を隠したものであるので、読者に対して、その名は何という名なのかという想像を喚起する効果を發揮してしまう。「○○○○○」は、「物語」にこの一箇所しかない表記である。ここに、後述するような初版の序文の意図に反して、『今昔物語集』の意識的空欄の方法を思い浮かべることも可能であろう。

これまでは毛筆原稿本と聚精堂本の本文の差異だけが問題にされてきたが、その間に位置するものとしては、ペン書き清書本と初校校正本とが残されている。それらを見ると、驚くべきことには、ペン書き清書本も初校校正本ともに「白岩市兵衛」となっている。

ということとは、この部分の本文の変更は、現在残されていない二校や三校、つまり最終段階で行われたことになる。他にも、初校で手が入っていない箇所を見付けることができるので、これまでのような毛筆原稿本と聚精堂本の比較だけでは、もはや本文の成立過程を論じることができなくなってきている。

この「○○○○○」という表記を含む本文は、増補版の三五年と三七年の郷土研究社本に受け継がれるが、柳田文庫の朱書加筆本では、「○○○○○」を消して「何の某」に改め、振り仮名を大幅に削ってしまったている。この書き換えは、戦後の文芸春秋新社本や角川文庫本にも、ほぼ忠実に受け継がれている。そのため、これらの諸本はみな「何の某」という本文をもつことになる。この「何の某」は、物語五五にある「何某」と比べても、ほとんど差異を認めることができない。この「何の某」は、こう言ってよければ、読者に対して、その名は何という名なのかを想像させることのない平板な叙述になっている。この書き換えは小さなところだが、柳田がどうしても変えなければならぬと感じた箇所だったにちがいない。少なくとも、柳田が生きている間の到達点は「何の某」という本文だった。

しかし、柳田の死後出された増補版系の大和書房本は、三五年の郷土研究社本を底本とするので、「○○○○○」という本文である。新潮文庫本は底本が明記されていないが、この部分が「○○○○○」であることから、逆に、三五年の郷土研究社本を底本とするのではないかという推定が可能になる。しかし、さらに注意しなければ

ばならないのは、定本柳田国男集本が聚精堂本を底本にしたので、「○○○○○」という本文が復活した点である。以降の初版系諸本は定本柳田国男集本を底本とするので、岩波文庫を除いてすべてこの本文になっている。岩波文庫本が「何の某」となっているのは、「テキストは、筑摩書房版『定本柳田国男集』を底本としたが、『遠野物語』については、初版本（明治四十三年、聚精堂刊）、増補版（昭和十年、郷土研究社刊）および成城大学柳田文庫所蔵の著者加筆本と校合した」とあるので、柳田文庫の朱書加筆本の本文を採択したのでとわかる。この岩波文庫本は初版系といいながら、混合本文なのである。こうした例はあるものの、今日、初版系諸本の復活に伴って、「○○○○○」という本文が流布しているのである。

また、小さな問題であるが、まさに「定本」として權威をもつ定本柳田国男集本は、底本とする聚精堂本そのままでないことにも注意したい。聚精堂本の振り仮名を大幅に削っただけでなく、「河童」の表記を「川童」に変え、「題目」もこの表記に変えているのである。そのようにした理由は、今のところ不明としか言いようがない。なお、増補版系の新潮文庫は「川童」の表記をとっている。この本は三五年の郷土研究社本を底本とするのではないかという推定はすでに述べたが、こうした点から見ると、定本柳田国男集本の本文を参照していることも認めざるをえなくなってくる。こうした表記の問題まで考えてゆくと、初版系と増補版系の諸本の関係は単純にはいかない。

六、初版の序文／増補版の再版覚書と後記

『遠野物語』というストーリーは、「物語」や「拾遺」の本文に入る前からすでに始まっている。極端な言い方をすれば、表紙からもう始まっているのである。本というものの読み方を考えれば、当たり前前とも言えるこのことを、今、改めて考え直してみたい。

初版系諸本でいえば、「物語」の本文はその前に置かれた序文や「題目」の規制力を強く受けている。特に、序文は、佐々木喜善からの聞き書きの経緯を述べた部分、明治四二年八月末の遠野訪問を述べた部分、この本の存在意識を述べた部分の三つに分かれる。

まず喜善からの聞き書きの経緯は、「此話はすべて遠野の人佐々木鏡石君より聞きたり。昨明治四十二年の二月頃より始めて夜分折々訪ね来り此話をせられしを筆記せしなり。鏡石君は話上手には非ざれども誠実なる人なり。自分も亦一字一句をも加減せず感じたるまゝを書きたり」と述べられている。この叙述は、「感じたるまゝ」という表現が取り上げられ、「語りたるまゝ」「聞きたるまゝ」ではない異様さが問題にされてきた。^(注8)この「感じたるまゝ」は「物語」の本文の文学性につながるものだと考えられる。だが、それだけではない。例えば、「鏡石君は話上手には非ざれども誠実なる人なり」という叙述、これは芸人でも知識人でもない、素人の語り手だということの意味する。さらに言えば、その後の民俗学者や口承文芸研究者がフィールドワークの対象にしてきた伝承者の理

想的なイメージだと考えられる。さらに「自分も亦」と続けたとき、その「誠実」さはこの本全体に行きわたっているというストーリーができあがる。この語り手と書き手の「誠実」さこそ、後述する「目前の出来事」「現在の事実」を保証する人柄に他ならない。

そして、遠野訪問について詳しく述べた後、「斯る話を聞き斯る処を見て来て後之を人に語りたがらざる者果してありや」と述べている。「斯る話を聞き」は聞き書きの経緯、「斯る処を見て来て」は遠野訪問を指すので、以下の叙述は、いわば序文のまとめに当たる。柳田は「斯る話」や「斯る処」を「語り」にする代わりに書くという行為をもってこの本を作ったのである。そして、「我が九百年前の先輩今昔物語の如き」が「其当時に在りて既に今は昔の話」であり、「近代の御伽百物語の徒」の「談」が「妄誕」(嘘、偽りの意味)であるのに対して、この「物語」は「目前の出来事」「現在の事実」であるという位置づけをする。我々は、この叙述によって作られたストーリーに従って、以下の不可思議な物語を「目前の出来事」「現在の事実」として読むことを強制されることになる。しかし、ある「出来事」「事実」は、過ぎ行く時間の中で絶対に過去のものにしかならないはずである。そうした宿命を持つ「出来事」「事実」を「目前」「現在」と規定すること自体、大きな矛盾を孕んでいる。この矛盾を解決するために柳田が取ったのは、喜善の口から遠野の方言で語られたであろう「話」を文語体に直して書き表すという方法であった。^(注9)

二十五年後、増補版を作るとき、柳田は「再版覚書」を載せてい

る。「遠野物語」に限らず、柳田は版を重ねる際に、その本を出すことが社会に対してどのような意義をもつかということ述べてゆくことがある。そのようにすることで、その本に新たな生命を注ぎ込んで蘇生させてゆくのだが、その手腕は実に見事なものである。

「再版覚書」は、その最も顕著な場合だと考えられる。

「再版覚書」の中で、初版刊行以後の経緯について、次のように述べている。佐々木喜善が「手帖にあるだけを全部原稿紙に清書して」持って来たものを読んだ柳田は、「中々面白い」が、「何分にも数量が多く、又重複があり出したくものがまじって居る」ことを感じ取り、さらに「これを選び別けて種類を揃へ、字句を正したり削ったりする」ことも必要なので、書き改めている。しかし、その「原稿がまだ半分ほどしか進まぬ」うちに、喜善が『聴耳草紙』(一九三二年)を刊行してしまった。その後、「二十五年前の遠野物語を、重版するだけに止めて置かうかといふ意見」もあったが、鈴木脩一(棠三)の刪定整理の労を借りて、「順序体裁等はほゞ本編に準ずること」にし、「最初の計画の通り、重複せぬ限りは皆是を附載」し、「郷土研究其他の雑誌に散見する佐々木君の報告で、性質の類似するもの」を加えて完成した。「拾遺」がそれである。こうしてみると、「拾遺」には、柳田が「出したくないもの」が入っていること、『聴耳草紙』と重複する物語が含まれていること、鈴木脩一(棠三)に「一任」するかたちでできあがったことなどの問題が残されることになった。

しかし、柳田の「拾遺」に対する消極的な姿勢とはやや裏腹に、

「斯うして見ると初版の遠野物語ばかりが、事柄は同じであるのに文体がちがひ、且つ引離されてあることが如何にも理に合はない。或は是も書き改めて、類を以て集めた方がよかつたのかも知れぬが」という叙述が続く。「物語」と「拾遺」とは、「事柄」つまり内容が同じであるのに、「文体」——「物語」は文語体、「拾遺」は口語体である——が違い、分離しているという問題があるので、「物語」の本文を「拾遺」に合わせて口語体に書き改め、構成の上でも一つに統一しようという構想を抱いていたのである。しかし、結局、「記念の意味」を重視して、「物語」は「原形」のまま残すことになり、この構想はそのまま断ち切れなくなってしまった。こうした柳田の構想は、今日の「物語」重視、「拾遺」軽視の傾向から見れば、かなり異様なものだと言わざるをえない。おそらく、二五年の間に、柳田の関心が文学から学問へと動いてきたとき、「一派の学業の對象」たるにふさわしい「文体」にかつての「物語」を書き換えたほうがよいと考えるようになったのだろう。民俗の客観的な叙述としては、文語体の「物語」より口語体の「拾遺」のほうが遙かに優れた文体だからだ。しかし、「原形」を残したために、増補版の構成を苦心しなければならぬことになり、結局、「拾遺」を中心にした一冊の本にまとめるという当初の意識も後退していったことは、すでに述べたとおりである。

また、増補版に含まれる内容の中で軽視できないものに、折口信夫執筆の「後記」がある。こうして、柳田が自分の本に第三者の文章を載せるのは異例なことである。そうした柳田の意図に答えるべ

く、折口は柳田を「先生」と一回、「師匠」と一回、「学問の長者」と一回呼び、自らを「弟子」と呼んで、「先生の最記念すべき書物に、こんな事でも書いて頂けるのは、弟子としては、本懐至極、身に余る喜びである」とまで書いて、その師弟関係を強調している。この「後記」の末尾にも述べられているように、この文章には柳田の還曆を祝福する意図が働いている。後の折口の「先生の学問」(一九四六年)が柳田の古稀を祝福する記念講演であったことを思い合わせるとき、折口の「先生」という言葉遣いが柳田に対する祝福とつながっていることを考えずにいられない。

また、「何しろ、師匠の作物と言へば、過去の謙徳に育てられた者は、誰しもちよつと、手出しの出来かねるものである」という叙述もある。柳田の、最も優秀な後継者と目される折口のこうした言いは、今になってみると、後の民俗学者や口承文芸研究者の柳田に対する関わり方を大きく規制したのではないかと想像される。柳田を慕う彼らは、無言のうち(注10)、「過去の謙徳に育てられた者」になつていったのだと思われる。「過去の謙徳に育てられた者」というイメージは、民俗の伝承者と研究者の求められた姿だったのである。このようにして、読者の代表として折口を指名し、「後記」を書かせた柳田には、おそらく日本民俗学を確立するための用意周到な配慮があったにちがいない。しかも、三五年の郷土研究社が第一回日本民俗学講習会の際に「特別頒布」されたものだった(注11)ということを考慮するとき、この本は、新しい学問である民俗学を象徴する書物として意義づけ直されたのだと考えることができる。

注

- (1) 石井正己『遠野物語』の表現を読む(『日本文学』、一九九一年八月)。
- (2) 野村純一・菊池照雄・渋谷 勲・米屋陽一編『遠野物語小事典』(ぎょうせい、一九九二年)は、「参考文献目録」で「初版を底本にしているもの」「増補版を底本にしているもの」という分類をする。これを参考にした。
- (3) 吉沢和夫『遠野物語』献辞考(『山形の民話』、一九八八年一〇月)があるが、戦後、増補版系の文芸春秋新社本からなくなり、初版系の定本柳田国男集本から復活している。赤坂憲雄『山の手精神史―柳田国男の発生―』(小学館、一九九一年)。
- (4) 注2の事典の「参考文献目録」を参照。
- (5) 小田富英「初稿本『遠野物語』の問題」(『国文学』、一九八二年一月)。
- (6) 例えば、物語二の頭注「マーテルリンクの「侵入者」を想ひ起さしむ」が初校校正本でもまだ書かれていないことなど。
- (7) 岩本由輝『もう一つの遠野物語』(刀水書房、一九八三年)。
- (8) 石井正己「柳田国男の仕事」(『国語通信 東書 国語』、一九九二年一〇月)。
- (9) 井上ひさし「柳田国男への挨拶」(柳田国男『不幸なる芸術・笑の本願』、岩波文庫、一九七九年)の指摘につながる

る。

(11) 遠野市立図書館山下文庫蔵『遠野物語』(郷土研究社、一九三五年)の書き入れに拠る。

〈付記〉

本稿は、大会発表時の草稿をもとに訂正加筆したものである。本文は三五年の郷土研究社本に拠り、新漢字に改めた。発表で触れた表記の問題や「題目」、頭注・後注、頭見出し、「索引」の表とその仕掛けについての考察は、紙数の関係で割愛した。また、初版系の聚精堂本には、奥付の前に「柳田国男近業」という広告があることを触れずに済ませてしまったが、この点についても、稿を改めて述べたいと思う。なお、本稿の成るに当たって、資料の閲覧を許可してくださいと成城大学民俗学研究所・遠野市立図書館に御礼申し上げます。

(いしい・まさみ/筑波大学附属駒場中高等学校)